

# 障害者（児）・乳幼児・高齢者の共生による相互的発達に関する研究 （中間報告）

青山学院大学 角田雅昭

## 研究目的

高齢者、障害者（児）、乳幼児の介護や支援、保育（以下、支援とする）については、都市化、核家族化の急速な浸透により、家族に代わって社会で支援することが唱えられ、その実現が主に制度化によって模索されるようになってきた。いわゆる支援の社会化という問題である。しかし、この支援の社会化は、その支援の根拠となる制度を整備する過程において、様々なカテゴリーとその専門家を必要としてきた。このように、診断や判定により固定的な属性を付与され、それに応じて社会化された支援の実現を見る代わりに、対象者は必然的にスティグマを押しつけられることになる。さらに、そうした支援は、画一的な分類を前提としてしまうために脱文脈的なものとならざるを得ず、支援における個別性、状況性を失うことになってしまうのである。

こうした、制度としての支援とそれを巡る問題については、既にいくつか批判がなされてきていた。松倉が、ソーシャルワークの観点から、支援が必然的に他者を生み出してきていた問題点を超えなければならない近代（松倉，2001）であると指摘していることも、その一つである。しかし、こうした批判はいずれも制度の枠組みの中で行われており、制度の一部をなすカテゴリーの問題を根源から問えるものではなかった（角田，2004）。

このように、もともと人と人との営みだった支援が、社会化によりますます制度に依存を深めていく中で、現場からこの問題と対峙するところが現われてきた。高齢者のデイサービス施設を基点としつつも、決して制度やカテゴリーに囚われることなく、高齢者、障害者（児）、乳幼児、さらには健常者（児）の誰もが一緒に過ごせる場が現れたのである。しかし、設立者たちは、こうした姿が自然だと信じた（惣万，2003a）だけで、対峙することを目的に設立した訳ではなかった。もちろん、従来の制度の枠組みを大きく外れたこうした利用方法は、当初、自治体からの補助金も受けられず、独自事業としての運営を余儀なくされていた。ところが、徐々にこうした制度を超えた実践が認められるようになってくると、逆にその実践にあわせて制度が整備されるようになってきたのである。まさに、高齢者、障害者、子どもという、従来の縦割り制度の壁に穴を穿つこととなったといえるのだった。このような実践を先駆けて行ってきた施設のひとつが「このゆびとーまれ」（富山市）だった。

こうした施設がいずれも小規模で家族的な施設であることを標榜していることは、家族の意味を考える上でも興味深い。しかし、子どもの利用者から「そんなの、家族っていわんよ」（惣万，2002）と否定されたエピソードに象徴されているように、これらの営みは単に昔の大家族へのノスタルジーなどではなく、全く新しい関係性が相互的に創造されていると思われる。

このように、一緒に過ごす機会や場を失い、いわば他者化していた、高齢者、障害者、乳幼児、健

常者（児）らが、共に過ごすことのできる場に生起する多様な営みと、そこに見られるメカニズムの分析は、他者を巡る現代的な諸問題に直面している私たちにとって急務であると思われる。筆者は、3年前からこの現場でのフィールドワークを始め、そこに生起する発達と共生について、修士論文（角田、2005）にまとめていた。今回は、その研究をさらに発展させて、共生的な場において、相互的発達がどのように生起しているのかについて、その関係構造について分析し明らかにしていくことを目論む。

## 研究方法

このゆびと一まれのようには、高齢者、障害者（児）、乳幼児が相互に関わり合う場では、何気ない営みも分析対象になる可能性があると考えられる。些細な営みであっても、状況の中で相即的に生み出された相互行為であり、そこでの関係性こそが発達に大きな影響を及ぼしていることもあるからである。そのため、一見些末にも映る、日常の実践こそ詳細に分析する対象になってくる。それゆえに、超越的な立場から観照するのではなく、出来るだけ現場の利用者や職員との日常的な営みに深く関わる必要があった。また、記録方法についても、安易なAV機器の導入も日常性からの逸脱を招く恐れがあったため、主にフィールドノートへの記述にて対応することにした。

日常の実践に関わるといっても、しかし、富山は東京から少々距離があったため、訪問頻度は月に1回～2回、1回につき1日～2日程度にフィールドワークの条件は限られていた。また、デイサービスという施設の性質や非定期的なフィールドワークという状況のもとでは、同一対象者の発達を論じるには限界もあった。その観点からの分析については、今後の課題として残すことにして、本研究では、対象者を無理に設定せずに、場とその場に生起する相互作用について論ずることに力点を置いた。幸いなことに、回を重ねるにつれて、現場からは東京からときどき来るボランティアという立場で受け止められるようになっていった。それにともない、現場に馴染んでいくことを、筆者も実感していた。

しかし、フィールドワークを始めた当初は、馴染むということに少なからず抵抗を感じていた。馴染んでしまうことによって、現場の営みが見えなくなってしまうことを危惧していたからである。しかし過ぎていくうちに、馴染まないと見えてこないことの方が、圧倒的に多いことに気づいた。とくに、日常的な状況や関係性に関しては、なおさらのことだった。あるいは、こうしたこと自体が、この施設の共生的な特徴に起因するものだったのかもしれないと思えた。いずれにしても、馴染むことの意味に気づいて以来、利用者と一緒に遊び、あるいはお話しをして、時を過ごすことに専心していくようになっていった。当然のことながら支援という枠組みを介した関わりに囚われることもなかった。この施設には、他の施設のように所定のプログラムのようなものはなく、お天気次第でときどきドライブに行ったりバーベキューを楽しんだりする程度だった。そのため、ボランティアといってもあらかじめ所期の役割が期待されていることもほとんどなかった。

このようなアプローチになることは、全くの予想外だったが、これらはいずれも現場で姿勢や関わり方を即応的に変化させていった結果であり、その意味では現場の状況性・関係性の中では、必然的

な構えだったのかもしれない。

このように、筆者自身が深くフィールに沈降してしまう方法を選ばざるをえなかったため、分析枠組みについては、観察者である筆者自身もその対象に加えておく必要があった。それゆえに、そうしたことが可能な関係論による分析をここでは必要としていた。とくに、従来学習に関する有力な分析視座として注目されていた正統的周辺参加論（以下 LPP）については、その分析領域の広さと、対話的な関係性の営みを照らし出せるところから、共生の分析にも相応しいことが認められてきており（角田，2005）、本論でも LPP を分析視座に採用することとする。

## 現段階における考察

### 葛藤・他者・共生

先に、このゆびと一まれば、高齢者、障害者（児）、乳幼児が、一緒に過ごせる場であると述べたけれども、そうした場は平和で静かな理想郷を意味するわけではなかった。むしろ、異なる世代の多様な人が寄り添い合う以上、様々な葛藤は日常的でもあった。むしろ葛藤があるからこそ自然といえるのかもしれない。もちろん、同じ症例の人たちの専門施設などでも葛藤はあるだろう。しかし、このゆびと一まれの場合には、例えば高齢者と腕白な障害児との間に見られる葛藤のように、それぞれが背景としている状況や、歴史・文化も大きく異なるため、予定調和的に葛藤を解消していくことは、極めて困難だった。合理的な管理や支援により、予定調和的な生活や関係性が前提とされていた専門施設とは、葛藤の位置づけが異なっていると言えるのだった。

このように、地域に暮らす人々の多様性を、拠点という空間的な装置のなかで、そこに集うメンバーの多様性によって営まれる（平井，2005）ことを、このゆびと一まればをはじめとした「共生ケア」（平井，前掲）の特徴であるとされている。では、そのメンバーの多様性とはどういうことを意味するのだろうか。差異ある人々を排除してきた共同性とは異なる新しい関係性を目指すものとして「共生」の概念が登場してきたと、平井は述べている（平井，前掲）が、このことを裏返すならば、差異を前提とした関係性が「共生」であるともいえる。つまり、多様性とは差異ある人々のことを指すともいえるのだった。

しかし、本論では差異についてもう少し論じておきたい。なぜなら、差異という観点で多様性を述べるには二つの点で限界があるからである。ひとつは、個別性そのものを差異とするならば、単に一人一人を差異ある人々とすることにより、差異の意味が雲散霧消してしまうからである。もう一つは、仮に何らかの共通な属性を有するメンバーを差異によって区分したとしても、その差異グループを対立項として立てただけでは、差異と差異ない者との間柄がひとつの固定的なものに収まってしまう、問題も還元してしまうからである。これでは、当初の多様性も、予定調和的なものになってしまうのである。

これらについて、関係論的な視座から改めて見直せば、二つの問題点が浮き上がってくる。ひとつ目は、差異を差異と認めていた超越的な「観察者」の存在である。もうひとつは、その差異を生み出してきた社会性である。これらの問題をふまえて、もう一度差異ある他者を「自」との互換性に解消

できない(酒井, 1991)ものとして、さらには、最初から期待を裏切る可能性を秘めた存在として見直す必要があるだろう。その意味で、再び観察者でもある「自」も見直せば、その「自」自身も、私自身に対して互換性のない他者であるともいえるのだった(酒井, 前掲)。さらに、同じように共同性の意味を見直せば、そこには均質化志向によって、差異ある他者の排除が生じていたことが、改めて読み取れるのである。そして、「共生」とは、そうした「自」と互換性のない他者との、新たに構築する関係性の営みであるともいえるのだった。

そして、高齢者、障害者(児)、乳幼児、そして健常者(児)が集い、それによる葛藤が日常的ともいえる、このゆびと一まれという場は、まさに他者による「共生」の場といえるのである。

### 障害児と高齢者

ここでは、こうした「共生」の場において、他者として的高齢者と障害児がどのように相互作用しているのか筆者のフィールドノートから論究してみることとする。

この事例のとんちゃんは、当時3歳の男児で、半身に麻痺があるものの、そばで職員が転ばないようにしていたけれども、概ね自分で歩くことは出来た。言葉はこのときにはまだ片言だった。とんちゃんは、いつも元気で、腕白さのあまりに人にめがけて、積み木やおもちゃを投げたりして、いつも職員や高齢者から怒られてばかりいる子だった。この事例は、そんなとんちゃんと、高齢者の方と一緒にドライブがてら、海辺の公園まで行ってきたときの事例である。筆者は、このとき通い始めて、ようやく1ヶ月を過ぎた頃だった。いわば、ボランティアとしては新人だった。

#### 【事例：1】

(私と、とんちゃん〔仮名〕を除いた、高齢者の方々〔4名〕と職員〔2名〕は、海辺の砂浜に面した公園の東屋で、海というよりも、とんちゃんの行方を目で追いながら、お茶を飲んでいった。こうしたドライブには、高齢者だけでなく、障害者(児)もだいたいひとり一緒に行ってもらっていると、後から聞いた。)

まだ通いはじめて日の浅かった私が、とてもやんちゃなとんちゃんと一緒にいること(引きずり回されていること)に、高齢者の方々も不安を感じたのだろう。

とんちゃんと私が、あまりにも海に近づきすぎたこともそうした不安を大きくしたのかもしれなかった。

とんちゃんと私を見ている高齢者たちの中のひとりの高齢者の方が、思わず、「そっちいっちゃんあぶないよー」と、大きな声でとんちゃんに声をかけてきたのが聞こえた。

その声を聞いて、私ととんちゃんは、海辺を離れて東屋近くまで戻ってきた。

とんちゃんは、聞こえていたのかどうかはわからなかったが、手をつないでいた私が海辺を離れて東屋に向かって歩き出すと、嫌がることもなくついてきてくれた。

高齢者の方も、東屋に座っていられなかったのか、私たちの方に近づいて歩いていた。

お互いに近づき合うと、その方が私に、「(とんちゃんが)とびだしていっちゃんかもしれないけ」と、海の側で気をつけなければならない要点を、笑顔で耳元にそっと教えてくれた。

この事例は、ボランティアとして未熟な筆者と、やんちゃなとんちゃんの危なっかしい二人組を、海辺の公園で高齢者の方々が、心配そうに見守ってくれている情景だった。職員も 2 人いたのだが、彼らはこの時高齢者の方々にお茶をいれていた。

普段、建屋内でおもちゃを人に投げつけたりしていたため、とんちゃんは、高齢者の方々からは、どちらかという困った子どもの一人だった。（投げたおもちゃが、高齢者の方にあたったこともあった。）そして、そのようないたずらを見咎めると、職員だけでなく、高齢者の方々もよくとんちゃんを怒っていた。一方、とんちゃんは、そうやって怒られることに関して、全く意に介していないかのように、すぐにまた同じようにおもちゃを人やテレビに向かって投げていた。

しかし、海辺の公園に一歩出かけると、腕白なとんちゃんと彼のいたずらも、その意味が完全に入れ替わっていた。つまり、外にいるとんちゃんは、高齢者の方々が見守る相手であり、その行為は危険がないように気をつけておかなければならないことになっていたのである。室内では、いたずらして投げたものが人にあたる危険性があり、そちらに注意が向いていたけれども、広大な外の空間ではそうした危険性が減少した代わりに、元気なとんちゃんが夢中になって怪我をしないかどうか、高齢者の方々の注意が向かいはじめたようであった。

また、とんちゃんも、室内では人に向かってモノを投げるものがしばしば見受けられたが、外では人との距離が離れてしまうこともあってか、人に向かってモノを投げたりすることはなく、砂に混ざった少し大きな石を拾っては、海に向かって投げたり、自分の進行方向に向かって投げたり、また拾ったりして遊んでいた。また、モノを投げるだけではなく、波に向かって笑顔で走って行くなど、外の多様な環境の中では、あきらかに彼の注意の向けられる先にも変化が見受けられるようだった。一緒に海辺の公園に来た高齢者の方や職員が東屋からこちらに注視してくれていることも、あるいは、ときどき耳に入るとんちゃんに向けた声から、気づいているのかもしれない。

そして、高齢者が心配して思わず声を掛けてきたのは、未熟なボランティアだった筆者が一緒ということもあったと思われる。だからこそ、東屋に戻ってきた筆者に、そっと気をつけるべきポイントを耳打ちして教えてくれたのだらう。

こうした、施設の建屋内と外の公園との間で見られる、とんちゃん和高齢者の方々と、職員、ボランティアの関係性の変容は、とんちゃん自身の個人能力には、明らかな変化をとまなわないにもかかわらず（再び施設に戻ってくると、以前と同じように人に向かってモノを投げていた）、その状況性や関係性によるとんちゃんを巡る周囲の関係者側の見え方や関わり方の変容を生起させていた。一方、とんちゃんも状況の中の媒介の違いのなかで、遊びや人との関わり方に変容を生起させていたように映った。いつもの日常とは異なるとんちゃん和高齢者の方々、あるいは職員、ボランティアとの、新しい関係が、状況の中で相即的に再構築されているのであった。

さらに、支援 被支援という見方や関係性が、日常の多様な他者との相互関係の中で固定されておらず、またそうしたことを浮き上がってしまうようなプログラムなどもなかったおかげで、利用者である高齢者が、とんちゃんに危険がないように見守り、そうした高齢者の見守りを職員も信頼しているようであった。付け加えるならば、ボランティアに支援をする上で足りないことがあることに気づくと、そのことを気づいた高齢者が教えてくれたりするものであった。

こうしたことは、高齢者だけの施設では起こりうることではないだろう。また、ただ単に高齢者と障害児が一緒にいるということだけでも起きないことである。日常の中で、高齢者も障害児もお互いに関わり合う時間を重ねてきて、さらに、ときどきこうした公園へのお出かけなどという日常を離れる機会を設けていること、そして、高齢者や障害児への支援の中心が職員ばかりではないということ、そうした、様々な状況の中で、状況に即して生起する関係性だからである。しかも、その関係性は、けっして一方通行ないわばミーハンのI-R-Eに象徴される学校教育的なものではなく、高齢者や障害児、あるいは、職員、ボランティア相互に作用を及ぼし合い、相互に変容が見受けられるものなのである。

### 中間まとめと、今後の展望

本論では、上記のひとつの事例を挙げるにとどまっているが、現在、その他の事例についても分析を行っているところである。

分析にあたっては、すでに見てきたようにLPPによる視座から浮き上がってくる解釈の理論的な背景として、バフチンの「対話」という概念を想定している。先の事例に見られる、とんちゃんと高齢者との、施設内と外の公園での、相互の関わり合いとその変容は、まさにバフチンのいうところの「対話」であるともいえ、その変容についても、カテゴリーによる権威的な声との関係と、「多声性」という概念から説明が可能である(角田, 2006b)と考えている。

こうした想定を裏付けるように、惣万(2003b)は、「大人の介助者(専門スタッフ)が、あるターミナルケアの高齢者の世話をしようとしても拒否するけれども、5歳の女の子が髪を梳いてくれることは受け止める」(惣万, 2003b)と、末期の高齢者と幼児との関わりの可能性について、実際のエピソードから述べている。また、渡部は、自閉症児を育てている母親から、訓練を意識すると(自閉症の)子どもをかわいいと感じなくなるエピソードとともに、「私(母親)にとってそして晋平(自閉症児, 筆者注)にとって幸いだったのは、私が障害に対して無知だったということです。二歳を過ぎる頃まで、私は晋平を障害児だとは夢にも思っていませんでした。ただコミュニケーションをとるのがへたな子どもだと考えていましたので、何とか晋平とコミュニケーションをとろうということだけで一生懸命でした。」というひとことを聞いて呻ってしまったと述べている(渡部, 1998)。これらの実際のエピソードからは、従来特権的に支援や介護を行ってきた専門家が開いてきた世界とは異なる、専門的な知識を知らない普通の人々の関わり合いをベースとした支援や介護の可能性の世界が開かれているように思われる。

そして、このゆびと一まれが、専門性に特権を与えることのない新しい支援や介護の可能性の世界に容易に開いていられる理由として、現段階では次の4つの理由(角田, 2006b)が考えられることを提示しておきたい。

一つのカテゴリー(障害カテゴリーなど)に特化しない。

支援 被支援という役割を固定しない。

カテゴリーや役割を混在させて、施設の日常に「多声性」を実現。

（障害児・者，健常児・者，高齢者等を分けない）

コミュニケーションというもう一つの可能性の世界に開き続けようとしている。

（新しいコミュニケーションが，継起的に日常的に産出されている）

今後は，こうしたカテゴリーと専門性とその声について，単に特権的だというだけで批判して排除するのではなく，むしろこうした声もひとつの声として，これからはどのように現場に生かしていけるのか，フィールドワークによって，分析を重ねて明らかにしていく予定である。

## 引用文献

- 平野隆之 2005 『共生ケアの営みと支援 富山型「このゆびとーまれ」調査から』全国コミュニティライフサポートセンター
- 角田雅昭 2004 『インタラクションとしての社会福祉 共生とは何か』修士論文
- 角田雅昭 2005 正統的周辺参加による共生の探究 青山学院大学文学部『紀要』第47号, pp.49-66.
- 角田雅昭 2006a 障害児（者）支援実践から見えてくる共生 LPP による分析と会話から，発達心理学会ポスター発表資料
- 角田雅昭 2006b 共生的な障害児保育の再構築，日本保育学会口頭発表資料
- 松倉真理子 2001 社会福祉実践における「他者」の問い 脱近代ソーシャルワーク 『社会福祉学』Vol.42-1, pp.1-11.
- 酒井直樹 1990 他者と文化 『思想の科学』思想の科学社, No.125, pp.4-8.
- 惣万佳代子 2002 『笑顔の大家族このゆびとーまれ』水書房
- 惣万佳代子 2003a あすの100人を救うより今日の1人を救え 「このゆびとーまれ」はこうして生まれた 富山民間デイサービス連絡協議会（編）『富山からはじまった共生ケア お年寄りも子どもも障害者もいっしょ』筒井書房, pp.10-49.
- 惣万佳代子 2003b 見守られて死を迎える「このゆびとーまれ」のターミナルケア 富山民間デイサービス連絡協議会（編）『富山からはじまった共生ケア お年寄りも子どもも障害者もいっしょ』筒井書房, pp.38-23.
- 渡部信一 1998 『鉄腕アトムと晋平君』ミネルヴァ書店.